

ベースボール型教材に関する研究—クリケットを参考にして—

野崎汰朗（上越教育大学）

1. 目的

クリケットとは、英国発祥のボールゲームである。11人対11人で、攻守に分かれて試合を行う。相手が投げた球を打者がバットで打ち、相対して立てられた2本のウィケットの間を走って得点する。本研究は、既存のベースボール型教材と、教材化したクリケットの学習内容を比較し、クリケットの教材としての可能性を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

新潟県J大学学生20人（男女10人ずつ）を対象とし、ゲーム中心の授業実践を行った。2018年12月6日と13日に1回45分のベースボール及びクリケットの授業をそれぞれ2回ずつ計4回実施した。

①ベースボール「三角ベース」の概要

10人対10人。打者5人でチェンジ。守備者は5人ずつ。本塁・1塁・2塁。フェアゾーンは90°。走者が本塁まで帰ることで1点。ソフトバレーボール（円周約78cm、重量約210g）を使用。打撃は手で行った。

②クリケット「ハンドクリケット」の概要

本塁と1塁。フェアゾーンは360°。塁間を歩き来することで得点できる。それ以外は、「三角ベース」と同様とした。

ベースボール及びクリケットそれぞれ2回目の授業終了後に、全対象者に形成的授業評価及び対象者の感想アンケートを実施した。

また、授業の様子は、体育館2階のギャラリーから2台の固定したビデオカメラで撮影した。映像を元に、(1)バッターランナーがアウトにならず出塁したことを出塁成功とする出塁成功率、(2)キャッチアウト、送球アウト及び守備者のミスによる出塁を除くヒットの数からヒット率を算出した。さらに、(3)守備機会時触球数を計測した。(1)、(2)及び対象者の感想は、2×2の直接確率計算により、(3)はt検定を用いベースボールとクリケットを比較した。

3. 結果と考察

I. 形成的授業評価

形成的授業評価の各次元において、三角ベースとハンドクリケットの間に有意差は認められなかった。これはどちらのゲームも同程度の高い評価が得られたことを示している。

II. 対象者の感想

対象者の感想を(1)技能、(2)態度、(3)思考・判断の3項目とその他に分類したところ、三角ベース(39%)と比較してハンドクリケット(52%)の思考・判断に関する記述が有意に多かった($p=0.044$, 両側検定)。これは、ヒットゾーンが広いこと、守り方や打撃の仕方について思考・判断の機会が多いためであると考えられる。

III. 映像分析

(1)バッターランナーの出塁成功率

三角ベース(60%)とハンドクリケット(71%)間で出塁成功率に有意な差は認められなかった($p=0.182$, 両側検定)。この結果は、ハンドクリケットでも三角ベースと同程度、出塁が可能であることを示している。

(2)ヒット率

ヒット率は、三角ベース33%(26回)、ハンドクリケット67%(53回)であった。ハンドクリケットは三角ベースよりも、ヒットを打って出塁できることが示された($p=0.000$, 両側検定)。

(3)守備機会時の触球数

対象者ごとの触球数の平均は、三角ベース 6.7 ± 3.5 回、ハンドクリケット 7.8 ± 2.8 回であった。ハンドクリケットでも三角ベースと同程度の触球機会が得られることが示された($t=0.59$, $p>.05$)。

4. 結論

ハンドクリケットは、従来のベースボール型教材に劣らない教材であり、思考・判断を促す機会が多いことやヒットを打ちやすい特性などは、従来の教材よりも優れていることが明らかになった。

5. 文献

岩田靖(2016)ボール運動の教材を創る ゲームの魅力をクローズアップする授業づくりの探求. 大修館書店.